

管内をドライブしていると、防風林や山肌の落葉松の濃い黄色が目につくようになって来た。紅葉の時期は終わりつつある。錦秋の秋と言うには黄色が多すぎるのかも知れぬが、これが北海道の紅葉だ。その中にある一点の赤い葉が目には鮮やかだ。(H14/11/3 記)

さて、然別演習場への道筋に「慰霊碑への参道まで 300 m」の案内看板が出ている。これぞ、先般、駐屯地の資料館で調べものをしている時に、見学者から話のあった慰霊碑の事だろうと察しを付けて車を乗り入れた。畑の中にそれはあり、参道には轍があり、時折誰かが参拝しているのか供物が置かれていた。留魂の揮毫は鯉登行一氏、帯広で終戦を迎えた旧帝国陸軍最後の第七師団長である。



この留魂碑の説明は以下の通りである。

『留魂碑

北部軍飛行第三戦隊所属 陸軍大尉 故金井博道、同少尉栗田洪の両氏は、昭和 17 年

10 月 10 日午後 1 時頃、搭乗の 97 式司令部偵察機遭難により、当地で殉職されました。

当時の地主上村吉造氏は、両氏の殉職を悼み、墓標の周囲にトド松を植えて供養に努めましたが、当留魂碑は、吉造氏没後 墓標が朽ち松も枯れるに及び慰霊の意思を継いだ息女上村ヨ子氏の発意により 昭和 39 年 12

月 1 日現場に建立されたものであります。』

前の大戦を含むわが国の戦没者に対する現代日本人の冷淡なことよ！彼等の殉職があったからこそ、現代の日本が世界から少なくとも一定の評価を受けている筈だが、そのことを口に出すのも憚れる世の中が果たして正常と言えるのだろうか。そういう意味において上村父娘のお心遣いに深い感動を覚える。

さて、小生が出会ったその時の見学者は、飛行第一師団関係の方々であった。朔東の第 1 号で、現第 5 師団は、旧七師団の流れを汲み「熊師団」と称すべきだろうと述べたが、朔東に関係した旧陸軍部隊は七師団のみではない。飛行第 1 師団通称鎗部隊、及び第 5 方面軍直轄部隊がある。飛行第一師団は、現在の帯広駐屯地に所在したことであり、陸軍飛行部隊について調べてみた。

① 緑ヶ丘飛行場の造成と軍隊誘致

昭和七年、当時の帯広町が、市費 5,000 円を投じ、十勝監獄の囚人の労力を活用して緑ヶ丘に飛行場を造成した。これ以前から帯広町(市制施行は、昭和 8 年 4 月)は、軍隊の誘致運動を盛んに行っており、札幌所在部隊や旭川所在の部隊が噂され、緑ヶ丘に広大な市有地を獲得したことも運動に拍車をかけたようだ。10 代から 13 代の 4 人の師団長に陳情が為された。その結果か、陸軍全般の航空戦力の再編・増強の一環か、浜松駐屯の飛行戦隊の一部が緑ヶ丘飛行場(旧帯広市営球場跡付近=現在の緑ヶ丘公園内百年記念館横のスペース付近)に移駐してきた。

## ② 陸軍飛行場建設と北部 73 部隊の移駐

翌昭和 12 年 10 月からは、川西村別府高台（現在の帯広駐屯地所在地）に陸軍飛行場の建設が始まった。この飛行場は、「十勝國稲田飛行場」と呼ばれた。この飛行場新設に伴い、緑ヶ丘飛行場は閉鎖された。

昭和 14 年 7 月浜松で編成された北部 73 部隊（飛行第 62 戦隊：重爆撃機）が、15 年 10 月 31 日、付属機関と共に帯広に移駐した。独ソのポーランド侵攻・分割、英・仏の対独宣戦布告等の欧州戦局の急変、国策としての南進機運の醸成を踏まえた時局処理要綱、昭和 15 年作戦計画を基礎として航空部隊の新編・増強と再配置が行われた結果である。当時の飛行戦隊には、甲、乙、丙、丁の区分があり、62 戦隊は、丁部隊であり、双発の 97 式重爆撃機を装備していた。戦隊長は、波多野赴夫中佐以下将校 67 人、見習い士官以下 567 人の 634 人であった。帯広市は、帯広劇場を二日間借り切り、全員を招待して歓迎した。

## ③ 62 戦隊の転戦

16 年 11 月、南方軍戦闘序列に編入され、海南島の三亜で作戦準備に入り、開戦劈頭のマレー上陸作戦に参加した。爾後、東南アジア正面の作戦に参加した後、支那戦線に転じ、17 年帯広に凱旋。その後千島正面に転戦した。18 年には、機種を 100 式重爆（呑竜）に転換した。その後一部を南方軍に編入、少ない稼動機で、作戦に参加したが、ついに矢を折れという状態となり、19 年 11 月 12 日戦力回復と機種転換の為大本営から内地帰還を命ぜられた。

## ④ 第 1 飛行師団の帯広移駐等

北辺の戦雲は、昭和 18 年 5 月のアッツ島玉砕を転機として、急迫を告げてきた。大本営は、捷四号作戦準備の一環として、19 年 3 月に北方軍を第 5 方面軍に昇格・改編して、戦闘序列を命令した。旭川の七師団（司令部は当初：十勝会館《西 5 条南 10 丁目の現日本生命帯広ビル付近》、爾後現陸自帯広駐屯地音楽講堂付近）と共に第 1 飛行師団が帯広に移駐して来た。第 1 飛行師団は、鎚部隊と通称され、司令部を当時の帯広市大谷高女（大谷高校が 1977 年に移転する前の場所）に置き、当時の師団長は、原田宇一朗少将である。

戦闘部隊は、第 5、第 20、第 25 の 3 個飛行団等 8 個飛行戦隊等で保有航空機は約 190 機であった。占守島等に 20 飛行団、ウルップ・択捉に 25 飛行団を配置し、残余を帯広、計根別、札幌等に配置した。即ち千島方面に重点を置いた配置であったが、問題は、敵上陸前の航空撃滅戦に耐える飛行機援護の施設が未完なことであった。（戦史叢書）

第 5 飛行団司令部は、川西村別府（現帯広駐屯地所在地）に置かれ、司偵、重爆、直協の各 1 個戦隊が位置した。

（参考：朝雲新聞社編戦史叢書、帯広市史、飛行師団関係者の手記等の道東資料館資料等）